

術前画像の読み解きガイド 的確な術式選択と解剖把握のために

鈴木研裕

聖路加国際病院消化器・一般外科副医長

「担当患者を術前カンファでプレゼンしてね」。

学生実習や初期研修で外科をローテーションしている際によく聞かれるフレーズだ。プレゼンテーションを見れば、発表者が準備し理解しているのか、伝わってくるものである。ツボを押さえたプレゼンテーションを見ると、「デキる!」と感嘆してしまう。

外科医にとって術前に把握すべきことは数多いが、大ざっぱにまとめると、(1)現病歴・手術適応、(2)耐術能、(3)予定術式、(4)予想される合併症と対応手段、となろう。多くの研修医は、(1)から(2)まではうまくまとめてくれるが、(3)・(4)となると難しく、高難度症例ほど指導医のサポートが必要となる。患者によって状況が異なるうえに、術前診断法や手術手技が急速に進歩していることから、的確なプランを提示するには高度な知識と経験の両方が必要だからだ。まさに AI が苦手とする範囲であり、外科医の実力が出る。

『臨床外科』編集委員会により編集された本書はまさに、この点に注目した書籍である。編者代表の小寺

泰弘先生は日本外科学会専門医制度委員長を務められた日本外科学会の重鎮であり、本書からは教育の専門家として現状の問題点を指摘し、改善したいという気概が感じられる。的確な術式選択および的確な解剖把握に資するガイドブックをめざすべく、編者の「無理なお願い」(p.1)に応じた各分野の第一人者が、術式選択の要点や術前画像検査の読み解き方、術中判断の勘所を、570 枚の術前画像と術中写真とを対比させ、詳細に記してくれている。内容も幅広く、鼠径ヘルニア根治術から腹腔鏡下肝 S7 亜区域切除まで取り上げられている。また、各術式について概説だけに終わらず症例を例示しながら考え方が述べられているので、術式選択の分水嶺を理解する助けとなる。

読み進めていくうちに、まるでエキスパートのいる施設の術前カンファレンスに参加した気分になった。評者は上部消化管が専門であり、食道・胃の領域の術中写真を見ていると容易に手術をイメージすることができ、第一人者の考え方を体感した心地になった。ただ、次の大腸や肝

臓の領域に入ると、途端に術中写真から局所解剖を把握することに時間を費やすようになった。難しいことを承知で言わせていただくと、術式選択にかかわるポイントとなる解剖については、術前 CT と術中写真の間にイラスト解説があると、本書の伝えたい要点がより理解しやすくなると感じた。

言い方を換えれば、本書はどんなエキスパートであっても読み応えのある内容である。術前カンファレンスの準備に悩む学生・研修医だけでなく、これから執刀する外科専攻医にも、煩わしいと思いつつ(?)外科医のお相手をしていただいている放射線科医にも、そして高難度症例に挑んでいく消化器外科専門医にもお薦めできる良書である。エキスパートの先生方には、ぜひ専門外の方野についてもご一読いただきたい。令和時代のレジデントの気持ちに少し理解できるかもしれない。

●定価：9,020 円

(本体 8,200 円+税 10%)

[ISSN0386-9857]

医学書院 刊